

H. W. Bailey, *The Culture of the Sakas in Ancient Iranian Khotan*

吉田 豊

著者の H. W. Bailey についてここで紹介する必要はないだろう。十數年前に來日したこともある著者は、日本ではあまりにも有名である。彼の略歴はまた、ここで書評する著書の頁にも見い出される。著者の研究範圍はイラン學者の中では最も廣いと言えるが、その中でもコータン・サカ語の研究では半世紀にわたって第一人者であり續けてきた。彼の輝しい業績は、*Khotanese Texts I—VI*, Cambridge, 1945—67; *Khotanese Buddhist Texts*, London, 1951; *Dictionary of Khotan Saka*, Cambridge, 1979 に於いて遺憾なく示されている。

今回書評するこの本は、一九七九年十月にニューヨークのコロンビア大學で五回にわたって行なわれた講演をもとにしている。書名が示す通り、イスラム以前のコータンに居住していたイラン系の言語を話すコータン人の文化を概説したものである。この種の概説は既に *Khotanese Texts IV* の序に見い出されるが、今回のものはそれを補充擴大したものであり、その後の Bailey の研究がさらに盛り込まれている。全體は左記の五つの章から成り立っている。

第一章 コータン、國土と國民、儀式及び日常生活 第二章 居住地、環境及び社會生活

第三章 生活の文化面

第四章 コータン語の文獻からの拔萃譯

第五章 コータンを取りまく民族

これらの後に、本文中に用いられている漢語のリスト（引用された語が網羅されているわけではない）が Appendix として附け加えられている。Index は、人名、民族名・地名及び Topic の三部から成り立っている。

Bailey は上記の五つの章に於いて、コータン語で書かれた文獻及びそこに現われる語彙から、コータンの文化を浮き彫りにしようとしている。その意味でこの本は、イラン語の門外漢のみならずイラン語、コータン語を専門とする者にとっても有益な概説である。略號表を缺いているのは不便だが、これは著者による *Dictionary* のそれによって補うことができる。

残念なのは、より詳細な Index を缺くことである。一・二・三章はコータン語の分類語彙集の性格を持っているので、この點は特に惜しまれる。ここではそこで扱われている語彙を順にリストして、いくらかでも使用の便宜をはかることにしたい（なお、四・五章については既存の索引を利用することができる）。

コータンの名稱（二一—三頁）、諸言語に現われたサカ族の名稱（七一—九頁）、階級名等（一〇—一四頁）、臺所用具（一四頁）、金屬・礦物・寶石（一四頁）、道具類（一五頁）、衣服（一五—一六頁）、布地（一六頁）、コータン語文獻に現われた漢語の官職名（二三頁）、居住地の名稱（二六—一八頁）、自然・天體（二八—九頁）、曆に關する語彙（二九—三一頁）、地形を表わす語彙（三一頁）、植物名（三一—三三頁）、藥品名（三三頁）、動物名（三四—一六頁）、

食品名 (三七頁)、醫療用語 (三七—八頁)、商業に關する語彙 (三八—九頁)、法律用語 (三九—四〇頁)、十二支の名稱 (四一頁)、繪畫・寫經に關する語彙 (四三—四四頁)、音樂用語 (四四—四五頁)、王族の名稱 (四五頁)、僧侶などの人名 (四六—八頁)、コータン語に残存するイラン古代の宗教に由來する語彙 (四八—五一頁)、コータン語の佛教語彙 (五一—五五頁)、コータン語と密接な關係にある他のイラン語 (五五—七頁)、コータンの近鄰諸國の名稱 (五七—九頁)。

そのタイトルからも推測される通り、中央アジアの歴史を研究する者には第五章が特に興味深いものだろう。この部分と同様のテーマについては、近く出版される *Khotanese Texts IX* に詳述される豫定であるとう。この章の後半の匈奴がイラン系の民族であるとする Bailey の假説は、彼の論文 'Iranian in Hiong-Nu', *Monumentum Georg Morgenstierne I*, Acta Iranica 21, Leiden, 1981, pp. 22—26 を参照せよ。

最後にこの本を利用する際留意すべき點を述べて置かう。

引用されたコータン語に與えられた意味に關しては Bailey の *Dictionary* に對して爲られた批判 (R. E. Emmerick, *Indo-Iranian Journal*, 23, 1981, pp. 66—71) を、この書に對して同様であつては、例へば *brāmātā* (五三頁) の意味を "wakening" とするのほかに語源的である。従つてコータン語の意味については常に R. E. Emmerick and P. O. Skjerve, *Studies in the Vocabulary of Khotanese*, Wien (第一巻は一九八二年に出版された) 及び Emmerick の一連の論文を参照する必要がある。例へば *hāmāi* (二三頁) "barely flour" は、Emmerick and Skjerve 前

掲書 (二二—八九頁) によれば "wheat flour" を意味する。

引用されたソグド語の例は N. Sims-Williams による *Dictionary* の書評論文 ('Chotano—Sogdica', *BSOAS*, 46, 1983, pp. 40—51) でチャックする必要がある。従つて *wyšpyšt wyšpyšyh* (一一頁) *azāt* (一二頁) *z'mn'k' wzms* (三八頁) *zurn, pt-zurb* (四四頁) *tray* (九八頁) に關する記載は訂正されなければならない。これら以外では次の二・三の點に氣が附いた。ソグド文字では *z* と *š* は語末ではほぼ確實に、語中ではむしろかのニエスキリブで區別されている (N. Sims-Williams, Appendix to W. Sundermann, *Mitteliranische manichäische Texte kirchengeschichtlichen Inhalts*, Berlin, 1981, pp. 194—8)。従つて *šy* (三一頁) は *š* と *z* と轉寫されるべきである。 *šy'wyr* (五〇頁) の意味は *šy'wyr* W. B. Henning, *BSOAS*, 11, 1946 七—六頁の參照。 *knp', kända* (五六頁) は各々 *kynp', kembā* の誤植 (Henning 前掲論文 七二—四頁參照) *"m'yē* (七六頁) は *"m'yē* の誤植 *"wyr'wyr* (八六頁) 以外に、ソグド語文獻には *wyr'wyr* とする語形が知られていない (W. B. Henning, *Ein manichäisches Bet- und Beichtbuch*, APAW, 1936 九—一頁) *wunx* (九二頁) が *—wēn* と *—wēx* を持つ *—wēn* M. wunx, Chr. wunx から明らかである。

コニスム語 *šnd'ymd* (四九頁) は *šnd'ymd* と讀まれるべきである (D. N. Mackenzie, *BSOAS*, 33, 1970 五四—二頁參照)。 *šnd'ymd* の *šnd'ymd* は先行のソグド語形の爲に生じた誤植であり、削除されるべきである。 *šnd'ymd* W. B. Henning, *BSOAS*, 28, 1965 一—二頁 注四四の *šnd'ymd* は *šnd'ymd* の誤植。

子の實」の誤讀である。

イラン語を専門としない人によって讀まれることの多いこの本に、誤植が少なくないのは残念である。例えば Dar. Pers. 18, Xerx. Pers. h20 (八頁) は各々 Dar. Pers. e 18, Xerx. Pers. h26 の誤植⁹。Surr Kotal inscription line 7 (五〇頁) は line 8 の誤植である⁹。Book of Zambasta から引用した⁹ styindi (一一頁)⁹ serate (四五頁)⁹ Z14, 14 (四九頁) は各々 sajindi, serate, Z3, 113 の誤植である⁹。Bailey のこの著書を引用する際には、従って、いくらか慎重でなければならぬ。

しかしこれらの誤植の類が、Bailey の著者の價值を毫も低めるものではないことは言うまでもない。コータン語の文獻の内部から、コータンの歴史、文化を掘りおこすという作業は、Bailey の半世紀にわたる研究を通して始めて可能であったということを考えてみればそのことは明らかである。

(1) ただし、中央アジアの歴史・文化・言語に関する日本人の研究が参照されていないのは残念である。例えば西夏語・西夏文字 (九八頁、注四) に関しては、西田龍雄の諸研究は重要である⁹。

(2) Salt (一一三頁) は、H. Kumamoto, *Khotanese Official Documents in the Tenth Century A. D.*, 1982, University of Pennsylvania Dissertation 一九一—六、二七〇—六頁を参照。

(3) ソグド語では B. *twz*, M. *twj*, S. *tw'z*, Chr. *twž*, Mug. *twy'z* 「支拂」が在證され⁹。

(Columbia Lectures on Iranian Studies,
Edited by E. Yarshater 1), xii+109pp.,
New York: Caravan Books, 1982